

science & medical

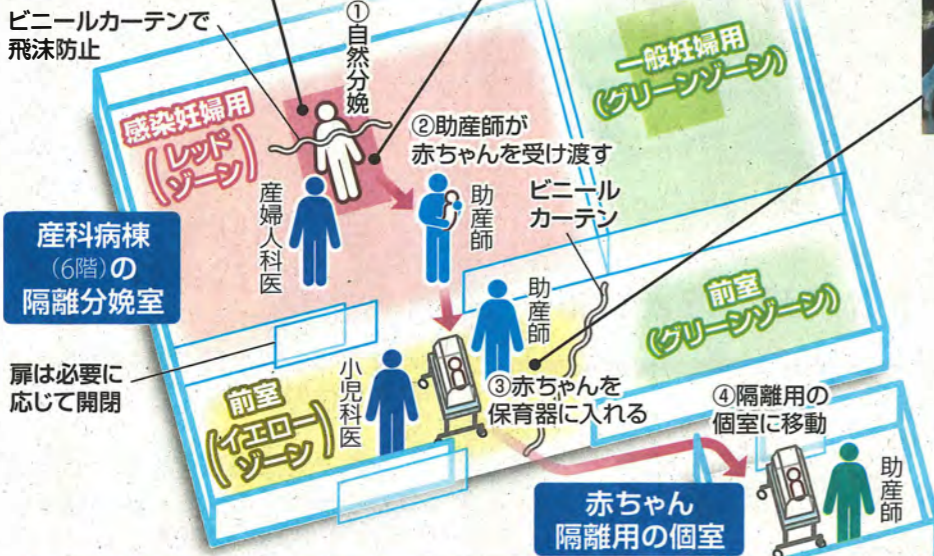


(写真はりんくう総合医療センターの古谷毅郎医師提供)

新型コロナウイルス感染妊婦の自然分娩



● 飛沫など懸念
 妊娠36週以降の妊婦が新型コロナウイルスに感染した場合、多くの医療機関では感染対策などを理由に帝王切開を選んでいる。しかし、王切開を選んでいる。しかし、王切開を選んでいる。しかし、王切開を選んでいる。



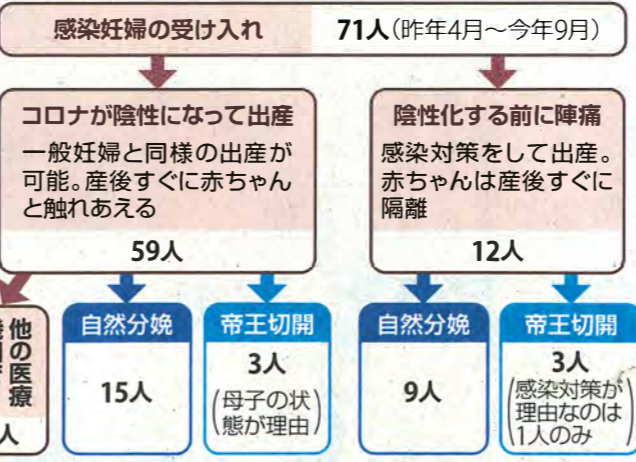
赤ちゃん用の個室へ
 赤ちゃんは2回の抗原検査で陰性が確認できれば、通常的新生児室に移る
 母親にはオンラインなどで赤ちゃんの様子を日々伝える。母子ともに陰性が確認されると対面。母乳も与えられるようになる



りんくう総合医療センター(大阪府泉佐野市)での感染妊婦の出産の流れ

感染症病棟(5階)に入院し、陣痛が来る前にコロナが陰性になることを目指す。コロナ診療と同時に妊婦健診。産婦人科医や助産師がほぼ毎日訪れ、病棟内にある超音波検査の装置などを使って母子の状態を確認

自然分娩(経膈分娩)	帝王切開
おなかを切らず、妊婦の希望に沿えるようにするため、可能な限り選択	コロナ症状の急変や胎児の心拍の異常、双子などの場合



多くの医療機関は、妊娠36週以降では「帝王切開」を選択している

● 自然分娩だと
 ● 帝王切開なら
 ・医療スタッフや他の一般妊婦への感染防止につながる
 ・分娩時間の短縮
 ・計画的に産産できる
 などが課題になるが...

26日	15~25日	14日	13日	11日	6~10日	5日	3~5日	9月22日	8月31日	2021年	
退院	授乳開始。徐々に次男と同室で過ごす。リハビリと育児指導を受ける	次男と対面 「おなかに置いてもらってほしい。早く抱っこしたい、授乳したい、力がわいた」	2回の陰性確認で隔離解除。産科病棟へ	「分娩中はいきむ力が出ず、帝王切開して」と頼んだが、産後もせきがひどく、おなかを切らずに良かったと思った」	「中等症IIに悪化し、酸素投与を開始。午後10時頃から15分間隔でおなかに張り」	「おなかの張りが痛みに変わる。助産師の内診で子宮口が開いており、産科病棟の隔離分娩室へ」	「産後37週で出産。産後、感染症病棟に戻ったが、呼吸状態が悪化した。一時的に「高流量酸素療法」(ネーサルハイフロー)を受ける	「産後37週で出産。産後、感染症病棟に戻ったが、呼吸状態が悪化した。一時的に「高流量酸素療法」(ネーサルハイフロー)を受ける	「産後37週で出産。産後、感染症病棟に戻ったが、呼吸状態が悪化した。一時的に「高流量酸素療法」(ネーサルハイフロー)を受ける	夫の新型コロナウイルス感染が判明 37度台の発熱。検査で長男(当時4歳)とともに感染判明 保健所から「入院先が決まった」 と連絡があり、りんくう総合医療センターへ救急車で搬送。肺炎がみられ、「中等症I」と診断された せきと息苦しさが日々悪化 「苦しくて動けず、トイレにも行けなくなった」	夫の新型コロナウイルス感染が判明 37度台の発熱。検査で長男(当時4歳)とともに感染判明 保健所から「入院先が決まった」 と連絡があり、りんくう総合医療センターへ救急車で搬送。肺炎がみられ、「中等症I」と診断された せきと息苦しさが日々悪化 「苦しくて動けず、トイレにも行けなくなった」

厚労省は「やむを得ない」
 感染妊婦の出産について、厚生労働省が作成した「診療の手引き」などでは、分娩時間の短縮や感染

対策を目的に、帝王切開の選択は「やむを得ない」などとされている。日本産婦人科学会が9月にまとめた中間報告では、妊娠36週以降に感染が判明した軽症や中等症の妊婦32人のうち、20人が感染を理由に帝王切開で産産していた。
 各病院の対応状況ははっきりしないが、大阪府内では、市立豊中病院(豊中市)も感染妊婦の自然分娩に取り組んでいる。国立循環器病研究センター(吹田市)は出産日を決め、陣痛促進剤を使って産産した事例がある。

デザイナー 申井徹男

月末までで71人に上る。まずは陣痛が来る前に陰性になることを目指し、感染症病棟でコロナの早期回復に注力する。感染対策で隔離する必要がなくなれば、通常のお産ができ、産後すぐに母子で触れあえる。
 感染症病棟には産婦人科医や助産師がほぼ毎日訪れ、母子の状態を確認する。お産が夜間になっても対応できる体制も整える。
 コロナ治療中に陣痛や破水が起きた場合でも、コロナ症状が悪化したり、胎児に心拍の異常があったりする場合などを除き、自然分娩を選択する。
 妊娠36週でコロナに感染した大阪市のパート従業員Aさん(35)は9月5日夜、同センターに入院。抗ウイルス薬を投与された。酸素投与が必要な「中等症II」に悪化した。男の子を自然分娩で無事産産した。「産後もおなかに傷があったら、すぐつらかったと思う。自然分娩ができて運が良かった」と振り返る。
 荻田和秀・産婦人科部長は「医療者側は都合で帝王切開を選ぶのは避けたい。可能な限り通常のお産に近い形でできるようにしたい」と話す。(東礼奈)

なるほど 科学 & 医療 医の現場

対策徹底 帝王切開を回避

分(経膈分娩)で産めるように取り組んでいる。帝王切開にするのは、自然分娩だと妊婦がいきむ際は、自然分娩が広がる懸念がある。ほか、出産が長時間に及べば、呼吸状態が悪化した妊婦には負担が大きくなる。帝王切開なら計画的に短時間で産産できる。
 らだ。感染妊婦用の分娩室を設けられない施設も多い。帝王切開なら計画的に短時間で産産できる。

● 早期回復に注力
 一方、同センターは、感染妊婦用と一般妊婦用の分娩室をそれぞれ設け、産科病棟内は感染の危険区域と安全区域に分けるなど対策を徹底。様々な診療科が連携し、多くの感染妊婦で自然分娩を実現している。受け入れた感染妊婦は9

月末までで71人に上る。まずは陣痛が来る前に陰性になることを目指し、感染症病棟でコロナの早期回復に注力する。感染対策で隔離する必要がなくなれば、通常のお産ができ、産後すぐに母子で触れあえる。
 感染症病棟には産婦人科医や助産師がほぼ毎日訪れ、母子の状態を確認する。お産が夜間になっても対応できる体制も整える。
 コロナ治療中に陣痛や破水が起きた場合でも、コロナ症状が悪化したり、胎児に心拍の異常があったりする場合などを除き、自然分娩を選択する。
 妊娠36週でコロナに感染した大阪市のパート従業員Aさん(35)は9月5日夜、同センターに入院。抗ウイルス薬を投与された。酸素投与が必要な「中等症II」に悪化した。男の子を自然分娩で無事産産した。「産後もおなかに傷があったら、すぐつらかったと思う。自然分娩ができて運が良かった」と振り返る。
 荻田和秀・産婦人科部長は「医療者側は都合で帝王切開を選ぶのは避けたい。可能な限り通常のお産に近い形でできるようにしたい」と話す。(東礼奈)